

鷗外博士の追憶

内田魯庵

青空文庫

若い蘇峰そほうの『国民之友』が思想壇の檯ひのきぶたい舞台として今の『中央公論』や『改造』よりも重視された頃、春秋二李の特別附録は当時の大家の顔見世かおみせ狂言として盛んに評判されたもんだ。その第一回は美妙の裸蝴蝶で大分前受けがしたが、第二回の『於母影』おもかげは珠玉を満盛した和歌漢詩新体韻文の聚宝盆しゅうほうぼんで、口先きの変わった、丁度果実くだものの盛籠もりかごを見るような色彩美と清新味で人気を沸騰ふっとうさせた。S・S・Sとは如何いかなる人だろう、と、未知の署名者の謎なぞがいよいよ読者の好奇心を惹起じやつきした。暫らくしてS・S・Sというは一人の名でなくて、赤門の若い才人の盟社たる新声社の羅馬字綴りつづの冠字で、軍医森林太郎もりりんたろうが頭目であると知られた。

鷗外おうがいは早熟であつた。当時の文壇の唯一舞台であつた『読売新聞』の投書欄に「蛙の説」というを寄稿したのはマダ東校（今の医科大学）に入学したばかりであつた。当時の大学は草創時代で、今の中学卒業程度ことのものを収容した。殊に鷗外は早熟で、年齢を早めて入学したからマダ全くの少年だった。が、少年の筆らしくない該博の識見に驚嘆した読売の編輯局へんしんきゅうは必ずや世に聞ゆる知名の学者の覆面か、あるいは隠れたる篤学であろうと想像し、敬意を表しかたがた今後の寄書をも仰ぐべく特に社員を鷗外の仮寓かぐうに伺候せし

めた。ところが社員は恐る恐る刺を通じて早速部屋に通され、肅々如として恭やしく控えてると、やがてチヨコチヨコと現われたは少くも口髯ぐらい生やしてる相当年配の紳士と思いの外なる極めて無邪気な紅顔の美少年で、「私が森です」と挨拶された時は読売記者は呆気に取られて、暫らくは開いた口が塞がらなかつたという逸事がある。（この咄は桜木町時代に鷗外自身の口から直接に聴いたのである。）

鷗外は幼時神童といわれたそうだ。虚実は知らぬが、「十ウで神童、ハタチで才子、二十以上はタダの人というお約束通り、森の子も行末はタダの人サ、」と郷人の蔭口するのを洩れ聞いて発憤して益々力学したという説がある。左に右く天稟の才能に加えて力学衆に超え、早くから頭角を出した。万延元年の生れというのは大学に入る時の年齢が足りないために戸籍を作り更えたので実は文久二年であるそうだ。「蛙の説」を『読売』へ寄書したのは大学在学時代で、それから以来も折々新聞に投書したというから、一部には既に名を認められていたろうが、治く世間に知られたのは『国民之友』のS・S・Sからである。

S・S・Sの名が世間を騒がした翌年、タシカ明治二十三年の桜の花の散った頃だった。谷中から上野を抜けて東照宮の下へ差掛った夕暮、偶つと森林太郎という人の家は

この辺だナと思つて、何^{なに}心^{こころ}となく花^{はな}園^{ぞの}町^{ちやう}を軒^{けん}別^{べつ}門^{もん}札^{さつ}を見て歩くと忽^{たち}ち見^ま附^{つけ}けた。出来心で名刺を通じて案内を請うと、暫らくして夫人らしい方が出て来られて、「ドウいう御用ですか？」

何しろ社交上の礼儀も何も弁^わえ^きない駈^{かけ}出^だしの書生ツぽで、ドンナ名士でも突然訪問して面会出来るものと思ひ、また訪問者には面会するのが当然で、謝絶するナゾとは以ての外無礼と考へていたから、何の用かと訊^きかれてムツとした。

「何の用事ありませんが、そんなら立派な人の紹介状でも貰^{もら}つて上りましょう、」とブツキラ棒に答へてツウと歸つた。

その頃私は神田^{かんだ}小川町に下宿していた。忌^い々^{まい}しくてならないので、歸ると直ぐ「鵑外を訪うて会わず」という短文を書いて、その頃在籍していた国民新聞社へ宛^あててポストへ入れに運動かたがた自分で持つて出掛けた。で、直ぐ近所のポストへ投^{ほう}り込んでからソコヲを散歩してかれこれ三十分ばかりして歸ると、机の上に「森林太郎」という名刺があつた。ハツと思つて女中を呼んで聞くと、ツイたつた今おいでになつて、先刻は失礼した、宜^{よろ}しくいってくれというお言い置きで御座いますといった。

考えるとコツチはマダ無名の青年で、突然紹介状もなしに訪問したのだから一応用事を

尋ねられるのが当然であるのに、さも侮辱されたように感じて向ッ腹むかばらを立てた。然しかるに先方は既に一家を成した大家であるに、ワザワザ遠方を夜更ふけてから、（丁度十時半頃であった、）挨拶あいさつに来られたというは礼を尽した仕方ふで、誠に痛み入ひそって窃に赤面した。

早速社へ宛てて、今送った原稿の掲載中止を葉書で書き送ってその晩は寝ると、翌る朝の九時頃には鷗外からの手紙が届いた。時間から計ると、前夜私の下宿へ来られて帰ると直ぐ認しためて投郵したらしいので、（この頃の郵便はこう早くは届かないが、その頃は今よりも迅速だった。）文面は記憶していないが、その意味は、私のペン・ネームは知つていても本名は知らなかったので失礼した、アトで偶ふつと気がついて取敢とりあえずお詫わびに上ったが留守で残念をした、ドウカ悪く思わないで復また遊びに来てくれという、慇懃いんぎんな、但し率直な親したみのある手紙だった。

折返して直ぐ返事を出し、それから五、六日して或る夕刻、再び花園町を訪問した。すると生憎あいにく運動に出られたというので、仕方がなしに門を出ようとすると、入れ違いに門を入ろうとして帰り掛ける私を見て、垣に寄添ちゅうちよつて躊躇ちゅうちよしている着流しの二人連れがあつた。一人はデツプリした下脹しもぶくれの紳士で、一人はゲツソリ頬ほのこけた学生風であつた。容子ようすがドウモ来客らしくないので、もしやと思つて、佇たちどま立たつて「森さんですか、」

と声を掛けると、紳士は帽子に手を掛けつつ、「森ですが、君は？」

「内田です、」というと、

「そうか、」と立ちながら足を叩いて頷れるように笑った。「宜かった、宜かった、最少し遅れようもんなら復た怒られる処だった。さあ、来給え、」と先きへ立って直ぐ二階の書齋へ案内した。「こないだは失敬した。君の名を知らんもんだからね、どんな容子の人だと訊くと、鞆かばんを持つてる若い人だというので、（取次とりつぎがその頃私わたしが始終提さげていた革かわの合切袋がつさいぶくろを鞆と間違えたと見える。）テツキリ寄附金勧誘と感違いして、何の用事かと訊かしたんだ。ところが、そんなら立派な人の紹介状を持って来ようとツウと帰ったというのが如何にも皮肉なので、誰か知らんと色々考かんえてる中に偶ふつと浮んだのは君だ。ドウモ君らしい。コイツ失敬しまつたと、直ぐ詫わびに君の許もとへ出掛けると今度は君が留守でボンヤリ帰ったようなわけさ。イヤ失敬した、失敬した……」と初めから碎けて一見旧知の如くであつた。

その晩はドンナ話をしたか忘れてしまつたが、十時頃まで話し込んだ。学生風なのはその頃マダ在学中の三木竹二みきたけじで、兄弟して款待されたが、三木君は余り口を開かなかつた。

鷗外はドチラかというところ・ハアテッドで、或る限界まで行くとそれから先きは
 厳として人を容れないという風があつた。が、官僚氣質の極めて偏屈な人で、容易に人を
 近づけないで門前払いを喰わすを何とも思わないように噂する人があるが、それは鷗外の
 一面しか知らない説で、極めてオオプンな、誰に対しても城府を撤して奥底もなく打解け
 る半面をも持っていたのは私の初対面でも解る。若い人が常に眷いて集まったので推して
 も、一部に噂されるような偏屈な狭隘な人でなかつたのは明白である。

だが、極めて神経質で、学徳をも人格をも累するに足らない些事でも決して看過しな
 かつた。十数年以往文壇と遠ざかつてからは較や無関心になつたが、『しがらみ草紙』や
 『めざまし草』で盛んに弁難論争した頃は、六号活字の一行二行の道聴塗説をさえも決し
 て看過しないで堂々と論駁もするし弁明もした。

それにつき鷗外の性格の一面を窺うに足る一挿話がある。或る年の『国民新聞』に文壇
 逸話と題した文壇の楽屋咄が毎日連載されてかなりな呼物となつた事があつた。蒙
 求風に類似の逸話を対聯したので、或る日の逸話に鷗外と私と二人を列べて、堅忍不
 抜精力人に絶すと同じ文句で並称した後に、但だ異なるは前者の口舌の較や蹇渋なる
 に反して後者は座談に長じ云々と、看方に由れば多少鷗外を貶して私を揚げるような筆法

を弄^{ろう}した。この逸話の載った当日の新聞を読んだ時、誰が書いたか知らぬがツマラヌ事を書いたもんだと竊に鷗外の誤解を恐れた。果^{はた}せる哉、鷗外は必^{てつきり}定私が自己吹聴のため、ことさらに他人の短と自家の長とを対比して書いたものと推断して、怩^{むっ}然としたものに見える。

その次の『柵^{しがらみ}草紙』を見ると、イヤ書いた、書いた、僅か数行に足らない逸話の一節に対して百行以上の大反駁を加えた。要旨を搔^{かいつま}摘むと、およそ弁論の雄というは無用の饒^{じょうぜつ}舌を弄する謂^いではない、鷗外は無用の雑談冗弁をこそ好まないが、かつてザクセンの建築学会で日本家屋論を講演した事がある、邦人にして独逸語^{ドイツ}を以て独逸人の前で演説したのは余を以て嚆矢^{こうし}とすというような論鋒^{ろんぽう}で、一々『国民新聞』所載の文章を引いては、この処筆者の風^{ふう}丰^{ほう}彷彿^{ふうぼう}として見はると畳^{たた}掛けて、暗に私に諷^あてつけて散^{さん}三^ざに当り散らした。ところが、この文壇逸話の筆者は私でなくて山田美妙であつたのだ。私は昔から人の反駁^{のみのこ}などは余り氣に掛けない方で、大抵は雲煙過眼してしまふし、鷗外の氣質はおおよそ呑^の込んでるから、威^{いた}丈^{だけ}高^{たか}に何をいおうと格別氣にも留めなかつたが、誰だか鷗外に注意したものがあつたと見えて、その後偶然フラリと鷗外を尋ねると、私の顔を見るなり、「イヤ失敬した、失敬した、アレは美妙が書いたんだってね、君かと思つたので

ツイ失敬した、まあ勘弁してくれたまえ、」と気の毒そうにいった。鷗外は向^{むか}腹^{はら}を立
 てる事も早いが、悪いと思うと直ぐ詫まる人だった。

鷗外は人に会うのが嫌いでも能く玄關払いを喰わしたという噂がある。晩年の鷗外とは疎
 縁であつたから知らないが、若い頃の鷗外はむしろ客の来るのを喜んで、鷗外の書齋はイ
 ツモお客で賑^{にぎ}わつた。

私が最も頻繁に訪問したのは花園町から太田の原の千駄木^{せんたぎ}時代であつた。イツデモ大抵
 夜るだった。随分十時過ぎから出掛けた事もあつた。或る晩、大分夜が更けたらしく思つ
 たので、丁度茶を持って来た少婢に向つて、「何時になります？」と訊^きくと、少婢は眠そ
 うな眼をしつつ、「モウ十二時で御座います、」といった。

すると鷗外は大喝して、「モウ十二時とは何だ、マダ十二時とナゼいわん、」と叱^{しか}りつ
 けた。私は気の毒になつて徐^{おもむろ}に起ち掛けようとすると、「マダ早いよ、僕の処は夜るが昼
 だからね。眠くなつたらソコの押入から夜具を引^{ひきずり}摺^{すり}出してゴ口寝をするさ。賀古^{かこ}などは
 十二時が打たんけりや来ないよ、」といった。

賀古翁は鷗外とは竹馬の友で、葬儀の時に委員長となつた特別の間柄だから格別だが、
 なるほど十二時を打ってからソノソやつて来られたのに数回邂逅^{であ}つた。

こんな塩梅^{あんばい}で、その頃鵜外の処へ出掛けたのは大抵九時から十時、帰るのは早くて一時、随分二時三時の真夜中に帰る事も珍らしくなかった。私ばかりじゃなかった、昼は役所へ出勤する人だったからでもあろうか、鵜外の訪客は大抵夜で、夜の千朶^{せんた}山房は品詩論画の盛んなる弁難に更けて行つた。

鵜外は睡眠時間の極めて少ない人で、五十年来の親友の賀古翁^{はなし}の咄でも四時間以上寝た事はないそうだ。少年時代からの親交であつて度々^{たびたび}鵜外の家泊つた事のある某氏の咄でも、イツ寝るのかイツ起きるのか解らなかつたそうだ。

鵜外の花園町の家の傍に私の知人が住んでいて、自分の書斎と相面する鵜外の書斎の裏窓に射^さす燈火^{あかり}の消えるまで競争して勉強するツモリで毎晩夜を更かした。が、どうしてもそれまで起きていられないので燈火の消える時刻を突留める事が出来なかつた。或る晩、深夜に偶^ふと眼が覚^さめて寝つかれないので、何心なく窓をあけて見ると、鵜外の書斎の裏窓はまだポツカリと明るかつた。「先生マダ起きているな、」と眺めていると、その中にプツと消えた。急いで時計を見ると払^{あけがた}曉の四時だつた。「これじゃアとても競争が出来ない、」とその後私の許へ来て話した。

尤も二時三時まで話し込むお客が少くなかったのだから、書斎のアカリの消えるのが白
 らし^らあ
 々明けであるのは不思議でない。「人間は二時間寝れば沢山だ、」という言葉は度々鷗
 外から聞いた。

ナボレオン
 「那破烈翁は四時間しか寝なかったそうだが、四時間寝るのを豪^{えら}がる事はないさ、」と平
 気な顔をして、明け方トロトロと眠ると直ぐ眼を覚まして、定刻に出勤して少しも寝不足
 な容子を見せなかったそうだ。

鷗外は甘^{さつまいも} 藪^{たけのこ}と筍が好物だったそうだ。肉食家というよりは菜食党だった。「野菜料
 理は日本が世界一である。欧羅巴^{ヨーロッパ}の野菜料理てのは驚^{うぐいす}のすり餌^えのようなものばかりだか
 ら、「ヴェジテラニヤン・クラブ」へ出入する奴^{やつ}は皆青瓢^{あおびょうたん}筆のような面^{つら}をしている。
 が、日本では菜食党の坊主は皆血色のイイ健康な面をしている。日本の野菜料理が衛養に
 富^とんでるのは何よりこれが第一の証拠だ、」というのが鷗外の持論であった。
 「牛や象を見たまえ、皆菜食党だ。体格からいったら獅子^{しし}や虎^{とら}よりも優秀だ。肉食でなけ
 れば營養が取れないナゾというのは愚論だよ。」

が、鷗外は非麦飯主義で、消化がイイという事は衛養分が少ないという事だという理由

から固く米飯説を主張し、米の營養は肉以上だといっていた。

或る時、その頃私は瘦せていたので、ドウしたら肥るだろうと訊くと、

「それは容易い事だ。毎日一度大飯を喰つて、日比谷の原（その頃はマダ公園でなかった）を早足で三遍も廻れば直き肥る。それには牛肉で飯を喰うのが一番だ。肉が營養があるというわけではないので、食慾を刺激するのは肉が一番だから、肉で喰うのが一番飯が余計喰える。」と大食と食後の早足運動を力説した。

鵬外の日本食論、日本家屋論は有名なものだ。イツだっけか忘れたが、この頃は馬鹿に忙がしいというから、何が忙がしいかと訊くと、毎日々々壁土の分析ばかりしているといった。この研究が即ち日本家屋論の一部であつた。この日本食論と日本家屋論の或るものは独逸文で書かれて独逸の学界で発表されたから日本よりは独逸で有名である。

独逸といえ、或る時鵬外を尋ねると、近頃非常に忙がしいという。何で忙がしいかと訊くと、或る科学上の問題で北尾次郎と論争しているんで、その下調べに骨が折れるといった。その頃の日本の雑誌は専門のものも目次ぐらいは一と通り目を通していたが、鵬外と北尾氏との論争はドノ雑誌でも見なかったので、ドコの雑誌で発表しているかと訊くと、独逸の何とかいう学会の雑誌（今はその名を忘れた）でだといった。日本人同士が独逸の

雑誌で論難するというのは如何にも世界的で、これを以ても鷗外が論難好きで、シカモその志が決して区々日本の学界や文壇の小蝸殻しょうかかくに跼蹐きよくせきしなかったのが証される。

鷗外の博覧強記は誰も知らぬものはないが、學術書だろうが、通俗書だろうが、手当り任せに極めて多方面に渉わたつて集めもし読みもした。或る時尋ねると、極細ごくほそい真書しんかきで精々せつせと写し物をしているので、何を写しているかと訊くと、その頃地學雜誌に連掲中の「鉞物字彙じい」であつた。ソナものを写すのは馬鹿馬鹿しい、近日丸善まるぜんから出版されるといふと、そうか、イイ事を聞いた、無駄骨折むだぼねおりをせずとも済んだといった。(それから一と月ほどして出版されたのを寄送すると、大遍喜んだ礼状をよこした。)

その時、そんなものを写してドウすると訊くと、「何かの時には役に立つさ、」といった。「何でも書物は一生の中に一度役に立てばそれで沢山だ。そういう意味で學術的に貴いものなら何でも集めて置く、」と書棚しよだなの中から氣象学会や地震学会の報告書を出して見せた。こういうものまでも一と通りは眼を通さなければ気が済まなかつたらしい。が、權威的の學術書なら別段不思議はないが、或る時俗謡か何かの咄はなが出た時、書庫から『魯文珍報ぶん』や『親釜集おやかましゆづ』の合本を出して見せた。『魯文珍報』は黎明期れいめいの雑誌文学中、

較や特色があるからマダシモだが、『親釜集』が保存されてるに到つては驚いてしまった。

一と頃江戸図や武鑑を集めていた事があつた。本郷の永盛の店頭に軍服姿の鵜外を能く見掛けるという噂を聞いた事もある。その頃偶つと或る会で落合つた時、あたかも私が入れた貞享の江戸図の咄をすると、そんな珍本は集めないよ、僕のは安い本ばかりだと、暗に珍本無用論を臭わした。が、その口の端から渋江抽斎の写した古い武鑑（？）が手に入つたといつて歓喜と得意の色を漲らした。

鵜外が抽斎や蘭軒等の事跡を考証したのはこれらの古書校勘家と一縷の相通ずる共通の趣味があつたからだろう。晩年一部的好書家が掖斎展覧会を催したらドウだろうと鵜外に提議したところが、鵜外は大賛成で、博物館の一部を貸してもイイという咄があつた。鵜外の賛成を得て話は着々進行しそうであつたが、好書家ナントものは蒐集には極めて熱心であつても、展覧会ナゾは氣紛れに思立つても皆ブショウだからその計画も撝取らないでどうとう実現されなかつた。（この咄については『明星』掲載当時或る知人から誤解であると手束して訂正されたが、これもまた鵜外自身の口から聴いたのだから、鵜外の思違いかも知れぬが取消さずに置く。）

若い人たちの中には鷗外が晩年考証に没頭して純文芸に遠ざかったのを惜んで、鷗外を追懷するにつけて再び文芸に歸る期が失われたのを遺憾とするものがあつた。

が、私の思うままを有^{ありてい}体にいうと、純文芸は鷗外の本領ではない。劇作家または小説家としては縦^{たとい}令第二流を下らないでも第一流の巨匠でなかつた事を肯^{あえ}て直言する。何事にも率先して立派なお手本を見せてくれた開拓者ではあつたが、決して大成した作家ではなかつた。

が、考証はマダ僅^{わずか}に足を踏掛^{ふみか}けたばかりであつても、その博覽癖と穿鑿^{せんさく}癖とが他日の大成を十分約束するに足るものがあつた。『帝諡^{ていしこう}考』の如き立派な大著を貢獻されたのは鷗外の偉大な業績の一つである。考証家の極めて少ない、また考証の極めて幼稚な日本の学界は鷗外の巨腕に待つものが頗^{すこぶ}る多かつた。鷗外が董督^{どうとく}した改訂六国史の大成を見ないで逝^いつたのは鷗外の心残りでもあつたろうし、また學術上の恨事でもあつた。

鷗外が博物館総長の椅子に坐るや、世間には新館長が積弊を打破して大改革をするという風説があつた。丁度その頃、或る処で鷗外に会つた時、それとなく噂の真否を尋ねると、なかなかソナわけには行かないよ、傍觀者は直ぐ何でも改革出来るように思うが、責任

の位置に坐つて見ると物置一つだつて歴史があるから容易に打壊す事は出来ない、改革に焦つたなら一日だつて勤めていられるもんじやないといった。

だが、鵠外時代になつてから目に見えない改革が実現された。陳列換えは前総長時代からの予ての計画で、鵠外の発案ではなかつたともいうし、刮目すべきほどの入換えでもなかつたが、左に右く鵠外が就任すると即時に断行された。研究報告書は経費の都合上十分抱負が実現されなかつたが、とにかく鵠外時代となつて博物館から報告書が発行されるようになったのは日本の博物館の一進歩である。鵠外は各国博物館の業績に深く潜思して、就任後一、二回落合つた偶然の咄のついでにも抱負の一端を洩らしていた。もし長くその椅子に坐していたら必ず新生面を拓く種々の胸算があつたろうと思う。正倉院の門戸を解放して民間篤志家の拝観を許されるようになったのもまた鵠外の尽力であつた。この貴重な秘庫を民間奇特者に解放した一事だけでも鵠外のような学術的芸術的理解の深い官界の権勢者を失つたのは芸苑の恨事であつた。

鵠外は早くから筆蹟が見事だつた。晩年には益々老熟して蒼勁精嚴を極めた。それにもかかわらず容易に揮毫の求めに応じなかつた。殊に短冊へ書くのが大嫌いで、日夕親

炙^{んしゃ}したものの求めにさえ短冊の揮毫は固く拒絶した。何でも短冊は僅か五、六枚ぐらしか書かなかつたろうという評判で、短冊蒐集家の中には鷗外の短冊を懸賞したものもあるが獲^えられなかつた。

日露戦役後、度々部下の戦死者のため墓碑の篆^{てん}額^{がく}を書かせられたので篆書は堂に入つた。本人も得意であつて「篆書だけは稽古^{けいこ}したから大分上手になつた、」と自任していた。私は今人の筆蹟なぞに特別の興味を持つてゐるのではないが、数年前に知人の筆蹟を集めて屏風^{びやうぶ}を作ろうと思立つた時、偶然或る処で鷗外に会つたので一枚書いてくれというと、また冷かしの種にするだろうと笑つて応じてくれそうもなかつた。「そんな事をいわずに墓碑の篆額を書くツモリで書いてくれ」と重ねていうと、「墓碑なら書くよ、生きてゐる中は險^{けん}呑^{のん}だから書かんが、死んだら君の墓石へ書いてやろう、」といった。

「調^{じやうだん}戯^ぎじゃない。君と僕とドツチが先きへ死ぬか、年からいつたつて解るじやないかい」。

「そりやア解つてゐるさ。君のようにむやみと薬を飲むカラダじゃないからね。年なんかアテにならん。僕がアトへ残るのは知れ切つてゐる。こりやあマジメだよ、君が死ぬべきと墓石へ書いてやる。森に墓銘を書かせろと遺言状に書いて置いてもいい、」と真顔^{まがおも}になつ

ていった。

一度冠^{かんむり}を曲げたら容易に直す人でないのを知ってるからその咄^{うちきり}はそれ切り打切とした。が、万一自分が鷗外に先んじたらこの一場の約束の実現を遺言するはずだったが、鷗外が死んでしまったのでその希望も空^{むな}しくなった。これは数年前、故和田雲郵翁^{わだうんそん}が新収稀觀^{きこうし}書の展覧を兼ねて少数知人を招宴した時の食卓での対談であつた。これが鷗外と款語した最後で、それから後は懸^{かけ}違^{ちが}つて一度も会わなかつたから、この一場の偶談は殊に感慨が深い。

私が鷗外と最も親しくしたのは小倉赴任前の古い時代であつた。近時は鷗外（のみならず他の文壇の友人）とも疎縁となつて、折々の会合で同席する位に過ぎなかつたが、それでも憶^{おも}出^{いだ}せば限らない追懷がある。平生往来しない仲でも、僅か二年か三年に一遍ぐらしか会わないでも、昔し親しくした間^{あいだから}柄^{めい}は面^{めん}と対^{むか}つた時にいい知れないなつかしさがある。滅多に会わないでも永い別れとなると淋しい感がある。

殊に鷗外の如き一人で数人前の仕事をしてなお余りある精力を示した人豪は、一日でも長く生き延びさせるだけ学界の慶福であつた。六十三という条、実はマダ還暦で、永眠す

る数日前までも頭脳は明晰めいせいで、息の通う間は一行でも余計に書残したいというほど元氣おうほう旺盛おうほうとしていた精力家の易簣えきさいは希望に輝く青年の死を哀かなむと同様な限りない恨事である。

（大正十一年七月十六日記、翌月『明星』掲載、大正十三年十月補筆）

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「明星」

1922（大正11）年8月号

※初出時の表題は「森鷗外君」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2011年5月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鷗外博士の追憶

内田魯庵

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>